

いの流水俳壇

「当季雑詠」

特選

七夕の竹に重たき願いかな

刈谷 志津選

大川 節弥

〔評〕七夕は五節句の一つで、天の川の兩岸にある牽牛星(鷲座の首星で白光を放つ二等星)と織女星(琴座の首星で白色の二等星)が年に一度七月七日の夜、天の川を舟で渡って相逢うという恋物語。また鵲の羽を橋として渡るといふ説もある。七夕は星を祭る行事で、五色の短冊に願い事を書き笹竹に結ぶ。竹の涼しさと、夕風に揺れる色とりどりの短冊がひらひらと翻り、涼を呼び夏の夜景が浮き彫りとなる。揚句の「竹に重たき願いかな」は、数多くの願いで竹が重そうに撓んでいるのではないかと、表面には見えないものに一步踏み込み、角度を変えて詠む着眼点の深さに、さすがの実力が見える。

鍬杖に会話のはずむ明日は喜雨

國田 貞子

〔評〕下五の「明日は喜雨」の喜雨は夏の季語で、早魃の続いた後に降る雨のこと。今年は梅雨入りしてから晴天続きで、空梅雨ではと心配された。特に手塩にかけて育てている野菜や植物には欠かせないのが水遣りで、雨季にはたつぷりの雨で、植物はぐんぐん成長する。揚出句「鍬杖に会話のはずむ」は、親しい隣人であろう。「明日は雨よ」の声の嬉しさに、手入れの鍬を休め、杖として継りながら楽しい会話となり、笑い声まで聞こえてくる。自然と共に一喜一憂しながら生きていく人々の生活が身近に見え、喜雨の有り難さが伝わる佳句。

青田風まといて馬頭観世音

津田 久美

〔評〕馬頭観世音とは、頭上に馬頭をいただいて忿怒の相をなした観世音菩薩で、馬が武士たちを乗せ戦いに加わり活躍したため、馬の保護神として特に江戸時代、徳川家康の当代に広く信仰された。また、馬は昭和の初め頃までは田圃の代田かき、その他種々の面で人の手助けとなってきた。揚出句「青田風まといて」で、馬の神様

が青田から涼風を受け怒った顔も和らぎ、如何にも満足そうに見える。時代は移つても、今も各地に残され手厚く祀られ祈願されている。平成の今、詠まれた貴重なこの一句により、馬頭観世音の存在を知り、古を振り返る証として、大切に守り残してゆかねばと思う。

入選

風を呼ぶように揺れいて古代蓮

東谷 晴男

側溝に水の溢れる竹落葉

小野川町子

定期バス一人で走る夏至の午後

岡村 嘉夫

水平線船点となる晩夏光

竹崎たかひろ

雨のあと真一文字に燕の子

島村かりん

形代に我が名記して息をかけ

森岡 照月

ほととぎす鳴く日なかぬ日水流れ

片岡 包女

夏見舞祈り届けと筆をとる

渡邊ゆかり

一句抄

五月晴れ雲に入りたる鶯の輪

片岡 包女

平穩に暮れゆく一日半夏至

小野川町子

戦禍にもめげず咲き続く夾竹桃

岡村 嘉夫

街灯の灯となる頃の貝風鈴

東谷 晴男

九十の母の手引きて茅の輪かな

竹崎たかひろ

夏萩のゆるる茶房のガラス窓

島村かりん

緑陰に数冊置きて詠みふける

森岡 照月

真向いの山田の茶小屋枇杷熟れる

川村 博子

断捨離の古き手紙や梅雨籠り

大川 節弥

桑の実を頬張る君も濃むらさき

國田 貞子

夏芝居顔を隠して視る子かな

津田 久美

雨の糸羽に重たき梅雨の蝶

刈谷 志津

次題「当季雑詠」

締切/毎月1日

投句先 教育委員会事務局

いの町1700-1

☎8933-11922

今月のことも川柳

雨あがり はっぱの水が ひかっている

枝川小 2年 細木 初乃

〔評〕雨の上がつた後、葉っぱの上の水滴が太陽に照らされ、まるでダイヤモンドのようにキラキラと光っていた。その時の様子が上手に表現されて素敵なお句になりましたね。

暑い夏 アイスと一緒に のりこえる

伊野小 6年 町田 京珠

〔評〕暑い夏のおやつは何と言っても甘くて冷たいアイスが一番ですね。そのアイスと一緒に夏を乗り切ろうと言うあなたの決意、私にも伝わってきます。応援しています。

ダンボール きちをつくって あそんだよ

川内小 5年 三谷 隼太

東大寺 しかのうんちを ふみそうだ

伊野南小 6年 伊藤 琉生

ありがとう みんなえがおに なるひみつ

伊野小 6年 森岡 花梨

よしいどん 歓声の声 せなかおす

伊野小 4年 岡田 彩

あめの日は あそぶじかんだ かたつむり

枝川小 2年 池添 蘭

もう五月 プールびらきよ 早くこい

枝川小 3年 中西 彩花

すいかわり 川べでみんな 楽しいな

枝川小 5年 山下 翔羽

一つだけ 神様に告ぐ 願いごと

枝川小 6年 林田ひより

「ことも川柳」は町内全小学校の児童のみなさんを対象に募集しています。次回提出締め切りは9月11日(月)です。たくさんのおみなさんの応募をお待ちしています。(応募は各小学校を通じてお願いします。)

※選評は、川柳連会のみなさんをお願いしています。